

# 衛門三郎信仰の考察

## 三教指帰・現代遍路との関連

### 底本と諸説

衛門三郎伝説の最古の記述は石手寺刻板<sup>(1)</sup>（以下）であり、それを底本に考える。

淳和天皇の天長（831）八辛亥の戴、浮穴郡江原郷の右衛門三郎は利欲にして富貴を求め、悪逆にして仏神を破る。故に八人の男子頓死す。それより髪を剃り、家を捨てて四国辺路に順う。阿州焼山寺の麓に於て病死するに及び、一念に伊予国司たらんことを言ひ望む。ここに空海和尚、一寸八分の石に八塚右衛門三郎の銘を切り、左手に封づ。年月を経て国司息利、男子を生み、家を継ぎて息方と号く。件の石を当寺本堂に置かしめおはんぬ。（原文漢文・永祿十年（一五六七）四月の日付がある、河野通宣による「石手寺刻板」<sup>(2)</sup>）

また、石手寺には巻物が伝わる。

また、三郎が四国巡礼 21 度目に逆打ちをした説<sup>(3)</sup>、再生して善行を行った説<sup>(4)</sup>、再度再来して一遍聖人となった説<sup>(5)</sup>、八坂寺の寺男であった説<sup>(6)</sup>、などがある。

### 共通点

これらの諸説に共通することは「三郎は富貴を求め無道であった故に八人の男子が死亡した故に家を出て遍路して焼山寺の麓で行き倒れるが、国司になりたいと希望し、空海大師が石を握らせ、河野家にその石を持った男子が生誕し、その石が石手寺にある」となろう。

- ①富貴を求め無道（無道の一つが放浪者を泊めないこと・接待の拒否）
- ②子供が死亡（無道が理由で子が死んだとすると業思想が根底にある可能性がある）
- ③家を捨て遍路
- ④行き倒れる
- ⑤国司に生まれたいと願う（人を助けたいと願った<sup>(7)</sup>）
- ⑥空海大師に石を授かり再生<sup>(8)</sup>

(1) 『四国遍路の研究』（頼富 本宏ほか著、国際日本文化研究センター、2001）p39「この衛門三郎伝説の初見となるのは、永祿十年（一五六七）四月の日付がある、河野通宣による「石手寺刻板」である。」

(2) 淳和天皇天長八辛亥戴。浮穴郡江原郷右衛門三郎、求利欲而富貴破悪逆而佛神、故八人男子頓死。自爾剃髮捨家順四国辺路。於阿州焼山寺麓及病死、一念言望伊豫国司、爰空海和尚一寸八分石切、八塚右衛門三郎銘封左手。経年月、生国司息利男子継家号息方、件石令當寺本堂畢。

(3) 根拠は発見できないので、強いせつの中のひとつと考える。参考「江戸初期の四国遍路 p240」柴谷宗叔著・法蔵館

(4) 「河野軍記」「河野系図」「予陽盛衰記」

(5) 「予陽盛衰記」

(6) 澄禅「四国辺路日記」

(7) 私は師匠よりそのように伝えられた。また下記の「予陽盛衰記」を参考にするとそのように考えられる。

(8) 「予陽盛衰記」p230 に三郎の再来者について次のようにある。「善哉。汝前生の悪心を翻して、忽ち善趣に志しより、今生なお怠らずして厭離穢土を願うの心深く切なり。当来必ず三界苦域の所住を遁れて、菩提の彼岸に至り、九品常楽の安養土に生ぜん事疑いあらじ。ここにまた、他力本願の功力なお重し。とても出離生死の身にならん者、衆生と共に浮かまん事こそ、真如実相の正理なり。いよいよ諸国を行脚して自佗の執を捨て、六十万人決定往生の主願を成就すべし。」とあらたに告げ給い、即ち夢はさめにけり。有難く、悉なくて、「我從來未熟の身に宗派を立つべきことなし。ただ神託に任せ、超世の悲願に住して、五虜六欲の風は吹くとも、自他諸共に如来の教法に従い、欣求浄土に至るの念仏に如かず。大乗円頓の器何ぞ外に求むることあらん。」

## 空海大師の辺土

次に、空海大師の四国辺土行が「三教指帰」に詳説されているので、それを整理する。

18歳で国学に学ぶ（三教指帰 p324-4「二九遊聴槐市」）

24歳で三教指帰を著わす（三教指帰 p346-9「未就所思忽經三八春秋」）

①生家は佐伯氏であり東北の奴隸を管理<sup>(9)</sup>していた。

②朝廷あるいは貴族に忠によって出仕して傾いた佐伯氏を再興したいと願うが、身分<sup>(10)</sup>が足りず四国に放浪したことが書かれる。蛭牙公子を批判し当時の支配層である貴族を批判する。

「何乖忠孝。復有一表甥、性則很戾鷹犬酒色昼夜為樂・・陶染所致也。彼此兩事每日起予・・」  
「歎進退<sup>これ</sup>惟谷（大学立身出世進学と帰郷という忠孝の間）」

③四国放浪の風体は見すばらしく瘦せて乞食の様であり、町中では瓦礫を投げつけられて冷遇されたことが書かれる。

「有假名乞兒・・漆髮剃隕（そりおとして）・・容色顛悴体形蕞爾（姿いやし）・・偶入市則瓦礫雨集、若過津馬屎霧來、……」

④町中で冷遇される一方で、抜け人の僧侶と、光明という名の者に厚遇されたと書く。

「阿毘私度常為膠漆之執友、光明婆塞時為篤信之檀主」

⑤浮草のような生活を辞退して、仏教を発心することが宣言される。

「固執如是不拘父兄不近親戚萍遊諸州蓬轉異境・・緇線飢人託<sup>つかん</sup>豊郷・・子持佛經

⑥空海大師の生涯のテーマとなる慈悲の根拠である輪廻による自他の師弟親子関係による自他平等思想が書かれる。

「三界無家・・或為汝妻孥（子）或為汝父母、有波旬（pāpiyas 悪魔）為師有外道為友・・」

⑦自他兼利濟・・何不去纓簪（官位のひもとかんざし）

①②③④より、上下身分社会の中位に生まれ、浮浪者の風体で四国を萍のように遍歴するが、町中では冷遇されるが、光明という接待者や、アビ私度僧に助けられる。

⑤⑥⑦より、自他平等観による自他兼利濟が宣言される。

①～④は、三郎の無道に一致する。富貴を求めるものは、逸脱者に対して非道であった。そして逸脱者が大師を救う。ここでいう逸脱者とは、下級の者という意味である。

③家を出て放浪したことは、三郎伝説と同様。

⑤～⑦は、生れ変わり人の役に立ちたいに符合する。

(9) 日本書紀に「皇紀五一年八月、日本武尊が東征で捕虜にした蝦夷の人々を畿内に住ませたが騒ぐので、播磨、讃岐、伊予、安芸、阿波に移した。この五国が佐伯部の祖の地である」と記される。その佐伯ノ部（べ）の民を支配したのが佐伯ノ直である。

(10) 「沙門空海」（筑摩書房、渡辺 照宏、宮坂 有勝、著）に詳細に検討されている。

# 衛門三郎伝説と三教指帰の補完性

## ①無道とは・行き倒れ人に酷い仕打ちをする

衛門三郎は見すばらしい僧侶を泊めず追い返したが、空海大師は三教指帰に「偶入市則瓦礫雨集、若過津馬屎霧来」と巷での酷い仕打ちを記している。三教指帰を読んだ弟子等が衛門三郎伝説の冒頭部分を書いたか、加筆した可能性がある。空海大師が言うように、「辺土では汚い姿であったばかりに瓦礫や馬糞を投げつけられた」ように、衛門三郎にも泊めてもらえず、ことによると箒で叩かれたのである。

これは確かめにくいことであるが、空海大師の辺土の項 - ①にみたように佐伯氏が

## ②家出の理由・困難と出奔・子の喪失で追い払った罪を感じたのか

出奔の原因は二通り考えられる。

### ①子の喪失

### ②行き倒れ人を追い払った罪の自覚

②だけで家出したとは考えにくい。というのはかりにも長者の頭首が出奔を許されるはずがない。子を喪失し、自暴自棄になったか、茫然自失して鋤も手につかず、家は荒れ果て、自ら役立たずの自分を恥じたか、または白眼視され追い出されるようにして家を出たのではないか。

空海大師は、国学に入学できず都に居れず、かといって家にも帰れず四国を放浪したと書かれている。空海大師も栄達できない自分を恥じて辺地放浪しその詳細を三教指帰に書いている。その放浪の理由は、

### ①忠孝に叛くこと

### ②貴族（蛭牙）の横暴

である。実は①と②とは関連している。②とは逃亡者（アビ法師）にたいする租税の追求が考えられる。また佐伯氏は奴隸管理者であり、東北の戦争や奴隸制度のあり方自体を問うている可能性がある。その精神的支柱が①の忠孝思想であることは言うまでもない。

## ③道中、衛門三郎も空海大師も行き倒れる

空海大師の辺土行は文字通り無一文の野宿辺土である。衛門三郎も、行き倒れることから見ても同様であったろう。

## ④救いはあったのか

空海大師は、阿毘法師は親友であり、光明婆塞は施与を頂いたと記す。阿毘法師は志を同じくする者であり、光明婆塞は接待者である。記述からは、町中の人々は冷淡であり、辺鄙な所に住む人や抜け人は親切だったということになる。

衛門三郎伝説はそのところを書いていない。三教指帰や現代の遍路によれば、大方の人

が援助をするわけではないが、少なくない人が三郎を援助したと考えなければ、何年間か生き延びることはできなかつたであろう。

## ⑤再生とは

空海大師は室戸で、谷（進退の谷間の苦しみ）は響きを惜しまず、明星（希望）が来影したと記す。その内容は、三教指帰の最後に書かれる、「自他兼利濟」と「何不去纒簪」である。ひとりだけ立身出世を願って上下社会に君臨するのではなく、自分と他人（敵対者）が共に幸福になる道を歩もうとの意気込みである。

衛門三郎は、ある説は「国司(11)に生まれたい」と記し、ある説は「自他諸人の成仏を願う」と記す。国司に生まれるだけが願いなら、依然として「求利欲而富貴」と同様である。これでは遍路は強欲を増大させるものとなるから不合理であり、「(自他兼利濟するために)国司（当時としては立派な役人）として生まれたい」と読むべきであろう。そうならば、衛門三郎伝説の主旨は三教指帰と重なるのである。

しかしなお、衛門三郎は遍路によって富貴を得たとする説は完全には排除されない。荒唐無稽ではなく、歴史的事実や現代の遍路に生きる新しい衛門三郎伝説が必要とされている。神仏を蔑み無道故に子が死んだのであるとすると、一族繁栄の為に憐れな人々に接待せよということになる。接待は、他人のためではなく自分が地獄に落ちないためになせというのである。

しかし、弘法大師が生き延びたのは先述のようにお接待によってであるから、三郎の無道とは既にお接待しないことであつた可能性は高い。また遍路が社会的認知を得てからは、遍路で無道といえ、お接待の欠如であることは言うまでもない。石手寺刻板は室町末期であるから既に遍路文化は興隆しているのだから、その時の無道とは接待の欠如なのである。

	衛門三郎		空海大師（三教指帰）	
日常	富貴を求める	強欲無道	立身出世・忠孝	蛭牙公子への憤懣
		行き倒れ人を冷遇	酷い姿で野宿し 巷で瓦礫を浴びる	身分が足りず国学に入れない
報い	八人の子が死亡		二兄相次いで死亡	
	悲しみ	罪責の念	忠孝に反するを恥じる	大忠・大孝とは
	家出		家出・進退谷まる	
	行き倒れ 空海大師に再会		食料尽きて、 仏教を担いで都へ	
	再生を願う 自他諸人の成仏 (一遍聖人)		自他兼利濟の明星来影	

## 江戸時代の遍路

空海大師や衛門三郎の遍路が「行き倒れ遍路」であることは先に明らかとなつたが、参考までに江戸時代の遍路を見たい。

(11) 何故、地頭や地方豪族ではなく国司なのか。

新城常三著「社寺参詣の社会経済史的研究」の第八章―第二節四国遍路 p1066-11に「江戸時代、元禄以降の一般農民・市民の遍路数を年間だいたい一万五千人ないし二万近いと推定しているが、乞食遍路は、その一割にもあたるのであろうか。」とある。

石手寺に供養塔があり、「為観道法師、壹百十五度目供養、明治二十三年五月」とあり、石手町のAさんの所へ観道法師の四代目の方がお骨を取りに来て私は読経した。四代目の話では「嫡男は20歳のある夜、突然姿を消したが、その後Aさんに助けられて四十数歳まで生き長らえて亡くなった」という。約20年で115回であるから、毎年5～6回であり、遍路一回40日とすると、歩くのは240日であるから、残りの4カ月はどこかの善根宿に連泊したこととなる。その拠点の一つがAさんの家であったと推察する。私の経験でもお遍路さんの一部は、遍路を臨終の場としており、当然金銭は尽きているか、僅かの年金で生活していて、拙寺にて何泊もされた方は何十人を越し、その中の何人かは職を得たり僧侶になったり、また生活を続ける場所としてこの寺がある。

私の小学生の頃、1965年頃には石手寺回廊に傷痍軍人が義足などを傍らに乞食していた。私より20歳ほど年配者たちは「回廊にハンセン病の方が乞食していた」と言う。以前仙遊寺さん主催の会で80歳過ぎの方が「久万町の私の村ではハンセン病の方をお泊めする家があり、そこで一週間世話をしては見送っていた」と話された。また善根宿のことを尋ねると、1930年生まれの方々の少なくない人が「お遍路が来ると座敷に寝かせ、自分たちは板の間で寝た」あるいは「お遍路は皆軒先の台車に寝かせていた」と証言する。寺院88カ所とは別に善根宿と接待という生き続ける装置としての接待88カ所の存在を忘れてはならない。

## 現代の遍路

下表は石手寺での歩き遍路さんを無料で泊める際の「遍路のきっかけ」アンケートに対する答えである。歩いてこられた方には、無料宿泊をお勧めするが、年配の方は道後に宿泊する方も多く、60-70代の方はもっと多いと思われる。

年齢別では、20代>30>60>50>40>70である。

また、20代>30>40<50<60>70である。歩き遍路では纏まった休暇と野宿しない場合には費用が必要となる。60-70代は定年退職後であるから時間の融通は効くとしても、50代以下は連休の取りにくい日本では時間の都合が最もつかない。私は、ある期間聞き込みをしたが、50代の失業者の多さに驚嘆したことを覚えている。ある方は「今、50代での求人はありません」と。

遍路の動機としては、

自分発見>供養>修行>旅行・運動>失業>病気治癒。

私が毎年行っている遍路では、圧倒的に女性が多く、その大半の動機は家族などの供養であり、上記の供養が多いことと合致する。

次に、石手寺歩き遍路宿泊者のアンケートから推察できるのは、リストラなどで失職中の若者が少なくないということである。自分発見や修行を含めると多くの若者が、失職し

たり、生き甲斐を見出すために混迷の遍路をしていることが分かる。また、先に 50 代の失職者の問題を提示したが、一昔前までは、荷車に家財道具を載せて遍路を「終の住居」にしている方が数十人居たことを記しておきたい。私はその内の約 10 人と懇意になり、当宿泊所で生活を共にした。

私は遍路には、困窮時の一時待避所としての機能が善根宿・接待行によって可能であったと考えるが、その機能は急速に衰えている。その理由は、「人生上の修行の軽視」「遍路人への尊敬の低下」「托鉢の禁止」「納経料の厳格化」「接待とその精神の貧弱化」であろうか。

遍路の動機							
年齢	計	20代-42人	30代-24人	40代-12人	50代-14人	60代-18人	70代-8人
失業	8	1 1	1 1	1	1	2	
季節労働		1					
供養	22	2 1	1	1	2 1	1	
祖父母		1 2	1 1			1	
父母			1 1		1	1	
妻夫の供養					妻 妻		
友人					1		
家族病気	3	1	1	1			
友父の勧め	8	1 2 1	2 1	1			
自分発見	24	1 6 2	1 2 2	3 1	1	3 1	1 1
空しくて	4					1 1 2	
何となく	8	2 2	1	1		1	1
旅行運動	10	2 3	1	1	1	2	
世の為	1		1				
憧れ	1		1				1
修行	12	3 1	1 1	外	3	(1)	1
憎しみ消す	1		1				
病回復お礼	2						1 1
案内本	9	2 3	1	1	2		
震災原発	1	1					
退職	2					1	1

各欄の数字は人数。左 2011 年、中 2012 年、右 2013 年

ここに見られる遍路の形態は、

- ①生活の困窮や、精神の悲嘆
- ②非難所としての遍路・困窮遍路を支える善根宿・接待の機能
- ③ -1 悲嘆者と悲嘆者の出会いと語り合い
- ③ -2 悲嘆者への接待者の共感支持、その根底にある遍路人を修行者としてみる尊敬の念
- ④上記②③や自然による精神の回復と新たな跳躍（再生）

一つの事例を挙げたい。

ある方が娘さんを自死で失くされ供養会に来られたので、お遍路に行くことを進めたところ、歩き遍路に出かけたが、ある日、年格好が彼女と同じぐらいの歩き遍路人と出会い、彼女が言うには「いままで誰にも娘のことを打ち明けたことはないが、語りかけたい気持ちになって話しました。そうしたら、彼女も娘さんを亡くされていたんです。始めて話せ

て少し楽になりました。楽になってはいけないんですけどね」と。そして彼女は命の電話のボランティアをしている。その理由は二つで、一つは「娘の死の原因が知りたい」でありもう一つは「他の娘さんを救いたい」である。

ある歩き遍路の若者が「自分の悩みは小さいことが分かった」と語ったが、「遍路人と遍路人」あるいは「遍路人と接待者」との「出会いと回復と善意への跳躍」が見られる。空海大師はボロを纏い巷で酷い仕打ちを受けつつも阿毘法師や光明という友人の好意によって自他兼利済の光明を得たし、衛門三郎は行き倒れになりつつも、臨終のきわに再生を祈ったのではないか。

## 遍路の種類

遍路の種類			
	困難	修行・癒し・共感	再生
空海大師	進退谷まる	阿毘私度・光明婆塞	自他兼利済
衛門三郎	罪・子供の死	空海大師と出会い	自他諸人救済
供養	喪失感・罪責	同じ境遇者の遍路	他人救済
困窮者	困窮	善根宿・接待	自分が善根宿を開始

## 再生（再来）の意味

再生の内容は、より富貴を求めて国司に生まれたいと願ったのではなく、自他諸人の成仏（幸福）を願ってであることは疑いないであろう。

そうであるならば、再生の意味は、空海大師が三教指帰に説く「自他兼利済」「何不去纒簪」を自分の発心にするということではないのか。空海大師は真言乗の用心として「三昧耶戒序」に「大悲心」を記す。この根拠は三教指帰に記す「三界無家・或為汝妻孥（子）或為汝父母、有波旬（pāpiyas 悪魔）為師有外道為友・・・」であり、自分と他人は互いに輪廻して親子の立場を入れ代わったり、師匠と弟子の立場を交互にしたりして皆肉親同様であり、故に「一切衆生を観ずることなおし己身のごとし」であるという大悲心を起こすべきだというのである。それは正に「自他兼利済・何不去纒簪」である。

そして衛門三郎が臨終の際に得たものも、「当初の富貴を独り占めして求めるのではなく自他諸人の往生（成仏）<sup>(12)</sup>」である。

そして、その具体的行為は何かというと、「行き倒れの人を追い払う」ことなく手厚く「善根宿」や「接待」<sup>(13)</sup>によってもてなすことであり、自他兼利済を実現することである。

## 現代訳衛門三郎伝説

以上より、私は次のように衛門三郎伝説の新訳を提案したい。

(12) 「右衛門三郎再誕の事（予陽盛衰記 230頁より）第七章 遊行上人由来の事」に記す。「・・・自他を執を捨て、六十万人決定往生の主願を成就すべし。」とあらたに告げ給い、即ち夢はさめにけり。有難く、悉なくて、「我從來未熟の身にて宗派を立つべきことなし。ただ神託に任せ、超世の悲願に住して、五虜六欲の風は吹くとも、自他諸共に如来の教法に従い、欣求浄土に至るの念仏に如かず。大乘円頓の器何ぞ外に求むることあらん。」  
 (13) 「理趣経百字偈」に「優れた智慧有る菩薩はこの世の生死の苦しみがなくなるまで、衆生の為になることを行って、自分だけ涅槃に行くことをしない。『秘蔵宝鑰』には「菩薩の用心は、みな慈悲を持って本（もと）とし、利他をもって先とす。万灯会の願文には4虚空尽き 涅槃尽き 衆生尽きなば我が願いも尽きなむ」。

のちの空海大師こと真魚は、二十歳で大学就学しようとするが、進退谷ま<sup>k</sup>って四国の辺地に生死を彷徨う。野宿して姿はやつれていたので街や市場では瓦礫や馬糞を投げつけられるような迫害も受けたとご自身が述懐されるようである。

そのような仕打ちを行った一人に衛門三郎が居た。彼は働き者で富貴たらんと粉骨碎身していたのだが、そこへ一夜の宿を乞うて来た僧侶風の旅人を怪しくまた汚く思い、同情しつつも追い払ったのである。

ところが、三郎には八人もの子息が居たのだが、あるとき次々と死んでいくという飢饉に襲われる。子煩悩であったのか、ことごとく子息を失った三郎は、鍬や鋤が手になくなり、一家は疲弊していく。悲嘆して働けなくなった木偶の坊の三郎は家の子郎党からも白眼視されるようになり、自ら出奔を決意するのである。真魚と同様に巷では冷淡にされつつも、人里はなれた辺地には心優しい、真魚の言うところの阿毘私度たる勝手自称僧侶や、光明婆塞たる生活接待者が居て、死のうと思う心を鼓舞して支えた。

このようにして自分を理解し支えてくれる人々を頼りとして辺地を巡ること二十回。三郎は心身衰弱して、ついに行き倒れる。

しかし、この時、三郎には一つの確かな思いが生じた。「私は、自分が家を失い放浪して、人間の冷たさに自分の行った非道を知った。しかし少なくない心の優しい人々が今まで私の命を長らえさせてくれたのである。こんどあのような行き倒れの僧侶が現れたなら、こんどこそは温かく迎えるものを。再度命を頂けるものなら、自分独り富貴を独占するのではなく、自他諸共に幸福になる道を歩みたい」と。

三郎はその意思を懐いてどこかへと再生するのである。

## 補足 1 逆打ちについて

巷では、三郎は逆打ちによって空海大師に会えた。そして許してもらったという。

石手寺古文書などには、逆打ちの記述はない。

私見では、順打ちは自分の修行を表し、逆打ちは利他行を表す。

空海大師に会うとは、空海大師と同じ発心の境地＝自他兼利済の境地になったということである。

## 補足 2 職業遍路

### 事例 1

ある野宿して回る遍路さんの話である。その人は借金をして追われる身であったという。四国遍路に出れば生き延びれるという話を聞いてやって来たが、「お接待で生きていけないわけではない」という。そうしたら「門打ち」を教わったという。家の門に立ってお経を声高に家人に聞こえるように読んで、布施を頂くまで続けるのだそうだ。そのようにして、白衣を整え、遍路の姿をすることにらってここまで来たという。そのような方が何人も居た。



## 事例 2

ある方は、兄弟の仲がこじれて会社を飛び出した。年金が7万円しか手に入らないので、居住を定めることが困難なので「しばらく遍路でしので、年取ったら貯金を食いつぶして生きていく」という。年に三回ずつ回っておられたが、だんだん疲れた様子なので、「しばらく泊まっていきなさい」と言うと、寺の仕事をせさせとしながら寺に何カ月か逗留しては遍路に出るということを繰り返し、三年後には寺にずっと居ることにして、アパート暮らしを選んだ。

## 事例 3

「正装して遍路らしくしていれば、接待を受けるが、見すばらしい格好をしていると汚く思うのか、接待を受けられない。だんだん汚い格好を嫌うようになってきた」と、いつも泊まっていく遍路さんは歎いた。しばらく寺に逗留したが、いざこざがありその後、この寺も遍路ルートから外れたようだ。よい寺は行くが、お接待のあるところへ行くという。彼は今も遍路を終の住み処とする一人である。

## 事例 4

その人は寺の門前に直立不動で一時間以上毎日、日課のように托鉢を繰り返していた。夜になると綺麗な白衣を脱いで、永木橋の下で寝ていた。その類の人は少なくなく、最近ではお寺ではなくスーパー小売店の前で行っている。その理由は、お寺が托鉢を禁止した（石手寺は禁止していない<sup>(14)</sup>）のと参詣人が布施しないからである（毎年のお遍路さんに聞いたところ、お坊さんがしない方が良くと言ったので止めたと言う方が複数居た）。

石手寺では、歩きのお遍路さんは無料で宿を接待し、場合によっては逗留を認めて、再就職や生活保護の需給などで生活ができるように補助をしてきた。その数は数十人になる。その理由は様々であるが、先のアンケート結果をみれば、リストラなどの失業で困難になった人も少なくない。

ある人は、供養のための遍路や自分探しの為の遍路は認めるが、生活困難からの遍路やそれによる周回を重ねる住み処としての遍路を認めないが、はたして、

### ①生活困難からの遍路、②生活困難からの周回重ね遍路

これらは、遍路から排除すべきものなのか。

供養の遍路の動機は二つ有る。

1. 故人の成仏のため
2. 遺族の悲しみを癒すため、あるいは故人の死を認めるため（別離するため）
3. 生前にしてあげたかったことへの後悔と罪滅ぼし

である。

特に、2. 悲しみの克服は、「癒しと再生の遍路」と意味付けできる。また3. の罪滅ぼしは再生への道のりである。リストラ等による生活困窮者の遍路は、たとえば「友人から遍

(14) お遍路さんが泊まった土佐神社の壁に残されているという歌。「宿なくしてこの宮に泊まりし候 書き置くも形見となれや筆の跡 我はいずくの土となるとも」元龜二年（1571年）

(15) 必ず何か月か毎に許可を求めてくる人が何人か居たのは2000年頃までで、今はなくなった。

路に出て、もう一度職業選択を自問するのが良い」などのアドバイスを受けてや、生活できない場合にも遍路で生活できるという接待文化に頼って志した場合が多い。その場合、彼らはリストラや会社での自己評価の低下に悩んだり鬱状態に陥っている場合があり、その落ち込みからの「癒しと再生の遍路」であると思われる。事例2の様に、少々の貯蓄が有って将来の不安などから遍路にみを寄せている場合でも、彼の性格は高潔で、他人に迷惑をかけずに生きたいという意地から遍路を志している。事例4は明らかに遍路を悪用しているように見えるが、遍路道が「癒しと再生の修行道」であるとするなら、彼らを排除するのではなく、門戸を開いて導き入れることが大事と思われる。

## 付録

石手寺に伝わる巻物に衛門三郎伝説はこう書かれている。<sup>(16)</sup>  
一昔、当国浮穴郡荏原の郷に人あり。名を衛門三郎と云いけり。其家代々富さかう。然に、此人の性たらく、慳貪邪見にして、財寶を貪り悪逆無道、神を蔑し仏を嫌う大悪人なり。然るに自らなす孽は逃るべきに他なし、思わざりき八人の男子俄かに皆悉く死に失せたり。夫れ子を思うは人の情なれば、これ程強剛の衛門三郎も頓て地に入る思いに堪ず、即時に邪見を翻し家を捨て身を忘れ、四国巡禮幾度いう数を知らず、時に天長八辛亥年阿州焼山寺の麓に病んでその身まさに終わらんとするにおよんで、不思議なる哉、空海大師一寸五分の石に衛門三郎と名を刻みつけ両手に授け給う。それより幾許の年月を経てか、河野息利の男子に生まれ来たり遂に家を継ぐ。息方と名乗り、この国を領せり。この人誕生のときに日数を経るに左の手を開くことなし。茲によって当山において祈願ありければ、頓に手を開かれしに件の石掌の中にありけり。則ちその石を当山に納む。寺号を安養寺と申しけるを改めて石手寺とぞ伝え侍りき。一

古来、石手寺のお弟子さんはお遍路さんが来られると右の巻物を開いて衛門三郎の顛末を読み上げていた。先代によると三郎は臨終のとき「人を助けたい」と願ったという。

(16)、原文は以下の様式である。昔、当国浮穴郡荏原の郷に人あり。名を衛門三郎と云いけり。其家代々富さかう。然るに、此人ノ性堂良具、慳貪邪見ルシテ、財寶を貪り悪逆無道、神越蔑シ仏乎嫌ウ大悪人利・・・。